

追悼！佐藤秋雄(羽山太郎)

★「あと二年俺は死なない迎えに行く」と伝えし君の訃報届きぬ

重信房子(2020年6月5日)



佐藤秋雄さんの5月27日の逝去を知らされて、呆然としています..

先日の上原敦男さんからの手紙では...電話で話し「はっきりした元気そうな声でしたが、10年前の大腸ガンに始まり、肝臓、左右の肺、前立腺と、次々ガンの手術をして『もう切るところがない。どうやって生きているか不思議だ』と医師にも言われたそうです。『おれは死なないよ』と笑っていましたが、実は大腸ガンが再発して、もう手術は出来ないそうですとの事でした。そして、一緒に活動していた私たちのことも懐かしそうに話し、「あと2年。俺は死なないから迎えに行ける」と断言していたそうです。

ここまで書いて思わず落涙。佐藤秋雄先輩、生きて出会いたかった...と感情が激しくて..

「ブントの労働戦線」といったら、佐藤さんが東京の代表で、反戦青年委員会の世話人として、良く知られていました。

明治大学の学生会館にいつも訪れては、昼間部、夜間部の仲間と明るく屈託ない大声で、闘いの意義を語り、ブントを愛し、情熱一杯だった佐藤秋雄さん。

「俺は福島の呑百姓だ！」「労働者の魂をブントはもっと知るべきだ！」「反戦青年委員会世話人なんて、パクられ要員だよ」豪快に笑いながら、あの67年から69年、何度でも逮捕されながら意気軒揚だった先輩を忘れることが出来ません。



遺作となった『ブント—その経験の一断面』で知ったのですが、福島から19歳で上京し、住み込みで旋盤工見習いとして働き「一旗揚げる起業の夢」は、1962年に専修大学二部の自治会活動でつぶれ、夜学生の切実な願い「二部差別反対」や「通勤、通学への学生割引」などを求め、明治大学の伊波尚義先輩たちと共に「夜学連」再建を目指し、日韓会談反対などを闘っていたと知り、新入生の私とその片隅で一緒にデモに参加していたのを知りました。

そして、佐藤先輩は、労働者仲間の鈴木雄作が明治大学に居ると引き合わせてくれて、初期現代思想研究会(現思研)メンバーの一人として、一緒に鈴木雄作と私がブントの加盟書を書いたのは67年春のことです。

そのころ専修大学の佐藤秋雄さん、中井正美さん、岩崎司郎さんら私たちは社会学同仲間で、中央大学の久保井拓三さんや前田さんらと、いつも一緒に行動していたのを思い返しています。

佐藤さんの本では、「1980年アイヌと出会って大きくその思想(行動様式)を変えた」と述べています。ブント流の理論ではなく、生きた人民、抑圧された人民、とくに琉球・沖縄や人民の歴史に依拠する闘い方に目覚め、現在まで闘い続けていることを遺作で伝えています。

「足のウラ」で学び、活動する一貫した姿勢で闘い続けた佐藤先輩。

「7・6事件」で、後にブント赤軍派となる塩見孝也さんらから、さらぎ議長共々リンチされながら、その怒りを闘いの力として、ブント赤軍派の誤りをしっかりと遺作にも記していて、又ブントマルクス主義戦線派との暴力を含めて、ブント赤軍派の塩見孝也さんらの事を、遅ればせに知りました。

ブント赤軍派の一員として謝罪しましたが、私をブント仲間としていつも暖かく励まして下さり、「オリーブの樹」にも寄稿して下さった佐藤先輩、再会の挨拶も果たせず、永別を迎えたことが無念でなりません。

明るく楽天的な革命精神、情熱の革命家、佐藤秋雄先輩に最後の敬礼を送り追悼します。合掌

★「いろんな話パレスチナの話聴きたいな」訃報と共に君の声届く